

『 神 真 医 学 』

ユニバーサル アプローチ <普遍的な手法>

はじめに

本年（2004年7月4日作成）は「理分」の年とお聞きしていますが、私のお役目と考えております『神真医学』の確立に少しでもお役に立てるよう修養・修達会員の皆様に、現在までの修報・修養会・修達会資料に加え、中山みき様のおふでさきによる、身上さとし・「八つのほこり」の説き分けを抜粋してまとめましたので、各会員の今後の「おたすけ」の一助となればとねがいます。

心が痛むとかならず肉体が痛みます。肉体が痛むと心はいたみはじめます。しかし肉体が病んでも、心が必ず痛むわけではありません。心身一如であって、身心一如ではないのです。肉体に障害があっても病気があってもそれを受け入れ、何故そのようなになったかを知る人が心に傷病を持つことはまれです。それどころか心をさらに豊かなものに変えていきます。このような人にとってはあらゆることが、人生を豊かに教師であるかのごとく映るのです。病気になってもけがをしても、その原因が何かを心に問うのです。原因はすべて己にあります。病気も事故も長い間かけて己が作りあげた「ほこり」です。心のむきです。この「ほこり」を反省して神懷で出直す手法を『神真医学』（ユニバーサルアプローチ）と呼びます。

1、医学を手法に対する考え方の違いから分けると、次の三ツとなる。

- （1） 臨床的な医薬と手術に依存している西洋医学を <メディカルアプローチ>
- （2） 民間医療と東洋医学を含めた医学を <ホリスティックアプローチ>
- （3） 普遍的な手法である『神真医学』を <ユニバーサルアプローチ>

このユニバーサルアプローチと前の二ツとの違いは、命をどう見るかです。ユニバーサルアプローチは、人間は生きなくてはならない存在ではなく肉体は必ず消滅するということを前提に組み立てられなくてはなりません。あらゆる生命にとって根源的に必要な観点は、如何に死するかということであるからです。いいかえるならばどのような人生の有様を日々「おかみ」の前に示すかということです。これが生きることの意味です。

2、現在医療の現状

現在医療は自然治癒力と免疫力の強化にはほとんど無力です。薬に頼ることは薬が無ければ治癒しない、免疫が生まれないということを意味します。肉体はすべての器官が連携して作られた免疫系です。一つでも欠けると免疫力は劇的に低下してしまうのです。事故などによる救命救急医療のように、薬も手術も自然治癒力と免疫力を高めるという確信がない限り受け入れてはならないのです。

病気に対する投薬と手術は悲慘を高めるだけです。肉体本来の機能に反して肉体を痛めつけてはならないのです。肉体を痛めるということは、神の社を傷めるということです。肉体を薬や不自然な食材は神の社を穢すということです。病んだ社や穢れた社からは神が遠退くということです。現在医療によって治癒しない人々が神を頼って今後とも私たちを訪れます。そして多くは治癒に向かいます。治癒の原因は明らかです。人間の作ったものは人間が治せると同様に、神の作った肉体は神にしか本当に治せないのです。

ヒトというのは三重になっており、先ず中心に魂が霊格を持ってある。それを包むように心が人格を持ってあるのです。一番外側に体すなわち肉体があり、肉体はそれらを入れるコンテナです。従ってこの神からの借り物・預かりものの身にメスや薬で汚すのは神の理に反しています。心は肉体に付随し魂の昇華に触媒します。つまり心によって魂は霊格をあげることも劣化させることもできます。霊格というのは十三段の十三階と聞いております。

3、輪廻転生

私たちは人間になるとき神様と約束した使命すなわち「やくわり」を持っています。約束した「やくわり」に背いた人の出直しは悲慘です。出直しの際に苦しみぬくというのは最大の悲慘です。病院にはそのような苦しみがいっぱいです。

全ての生命が輪廻しています。この世界であったときのあり方によって、あの世の段階が決まりあの世から転生する因縁（業）が決まります。現世は前世の延長線上にあり、この世における来世は現世の延長線上にあります。私たちは「おかみ」の御意志に沿って生きない限り、やがてすべては神元への出直しとなって、数十万年におよぶ「靈魂」の彷徨が始まることを知るべきです。かくのごとく知るが故に私たちは懸命に生きるのです。

私たちは神懷で生かさせていただいています。神懷で神々の守りを受けて生きています。しかし神々の加護のない人は、けもの悪神に操られてその運命を嘆いています。かつて親様は、身上（病氣）事情（様々な困難）は道（人生）の花（美しき景色）であると仰せに

なりました。様々な困難を乗り越え厄介な病気をものともせず、生きる姿は感動を与えずにはおきません。このような生き方は出直しによってもたらされるものです。困難をもたらした生き方を続けて困難の克服はありません。同時に厄介な病気をもたらした生き方を続けて病気からの開放はありません。事情は必ず身上になります。身上にはまだ見ぬ事情が現れます。ですから身上事情が現れたときが出直しのときです。この出直しを神懷で出直すといいます。どのような苦しみも悲しみもわが身恨みであるようにと仰せのごとく身上事情は何事もしっかりと受け止め、悪しきときは出直しをもってこれを納消することが大切です。

4、神元への出直しの理由

- (1) これ以上地上においていても、これ以上の魂の成長と更正は望めない
- (2) 十分な成長と更正を達成したので、次の次元に進ませたい
- (3) もう少し地上におきたいが、命を運ぶ肉体が耐えられない

「おかみ」のご意志とは

大神の願いは1つ
神の子が
共に手を取り
はげましあって
神仰世界に生きること
出直しの
罪と穢れを身につけて
神の慈愛を受けるには
ヒトを助けて生きるひとすじ
これ
どのように
聞いているやら

「おかみ」は何をお考えになっておられるかをあれこれいう前にこの神諭をしっかりと聴く必要があります。「おかみ」は願っておられるのです。私たちが手を取りあって励ましあうことを。いつも目には見えぬかもしれないが、神懷にあるということを信じていきなさいと。多くの罪を犯し穢れを受けた状態であっても、神の慈愛を受け

て人生を終える方法があります。その方法はしっかりと間違わずに聞きとり実行しなくてはなりません。ヒトを助けるということです。「おかみ」はこのように仰言り、今、神に帰ることこそ栄光であり、再び最初に見るものは仏の光なのだ、そこにみょうらくの世界が広がり魂とそのあり方が清められると仰せなのです。

5、八つのほこり

(1) 惜しむ心（面足之命）

ちよとした心づかい気配りを惜しむな
自分の使った食器をそのままにしておくのも骨惜しみの一つ。嫌なことを人にさせて自分は楽をする。

(2) 欲しい心（国常立之命）

北に向こうて欲しいと言うな
心もつくさず身も働かずして金銭を欲しがる。何事も「たんのう」の心を治めるのが肝心である。

(3) 憎む心（惶根之命）

憎い息が止まるぜ
自分のために思っ言ってくれる人をかえって悪く思っその人を憎む。嫁・姑の身内同士の憎みあい

(4) 己可愛い心（雲読之命）

東に向こうて可愛いと言うな、可愛いという思いが出入りをたつ。
わが身さえよければ人はどうでもいい。決して自分では悪いことをしたと思っっていない。むしろ良いことをしたと思っっている。

(5) うらむ心（国狭土之命）

うらやむ つなぎがなくなるぜ
わが顔つぶれたと人をうらみ、わが望み妨げたとして人をうらむ。

(6) 腹立ちの心（月読之命）

腹立ちやめよ屋台がこわれるぜ
腹立ちはきままから、おのが理を立て人の理が入らんから腹が立つ。

(7) 己可愛い欲の心 (大食天之命)

欲一切はこうしなくてはならないとおもい切るものも切れず
人より多く身につけたい取れるだけ取りたい。

(8) 高慢な心 (大戸辺之命)

西に向こうてごうまんは育てを切る
力もないのに自ぼれ、高ぶり、富や地位をかさにきて人を見下し踏みつける、人の欠
点あらをさがす。

【身体における八柱之大神様のご守護】

部位	守護神	おさとし
髪	月読之命	髪は神さん
頭髮・上部	月読之命	喜びの中で懸命に突っ張り頑張る
髪その他	国狭土之命	抜いても生える根っこが大切 脱毛 つなぎが悪い 永久脱毛 孤独 若い人で毛の薄い人 根っこがしっかりしていない
頭全体	国常立之命	月様の理
左側	国常立之命	父
右側	面足之命	母
後頭部	大食天之命	切るのが下手、決断が弱い。手放しであんたの欲を捨てなあかん。
てっぺん		自分の父・主人・目上・お神のおいかり
ひよめき		実の親（前頭葉）
そりこみ		親不孝者
顔全体	面足之命	日様の理
額		母親大事に
眉間	国常立之命	色情・因縁・腹たちあい・むこうで悪くする しわ縦一本 嫁さん早死に、他につくる 縦二本 こわくない
目	国常立之命	月様の理 水気・浄化
瞳		両親・恩人の大恩を忘れている人
右目	面足之命	重体になる急ぐ、火の浄め急ぐ
目頭		家の内々の関係
目尻		外の関係
瞼		日様の理 人を見下げている
頬	惶根之命	体汚れている にきび 親に対してきつい、内弁慶
鼻	面足之命	日様の理
左鼻		考えすぎ、男はと論理探る 浄め
右鼻		思いすぎ、AかBか迷う 変化

部位	守護神	おさとし
鼻柱		神の理に背く 自分のしたことを鼻にかける、高慢が出かけている
人中		神がつないだ人との不幸 人中を隠すひげ つながってこいという高慢 考えの善悪を正しく持つ人は OK
右耳	大食天之命	決断力に欠ける（難聴）
左耳	惶根之命	理屈ばかり
耳の輪		人に憎しみを受けている、生霊・原因を反省
耳たぶ		良いことを聞いても良いとは思わない（鈍感） 悪いことに敏感、ピアスを開けたいはその信号 耳鳴り 目上に対して恩が足りない
こめかみ		腹立ち・力の入れすぎ 火の加減
口	惶根之命	言葉と食べ物との理
唇	面足之命	笑顔は唇によって作られる
		口くさ 言葉が間違っている・乱れている 胃の悪い人 言葉を整えワッハッハで治る
口の中		言葉いっさい気をつけよの理
舌	惶根之命	ゆーてることがおかしい
歯・歯ぐき	大食天之命	はれ 言葉にしまりが無い、言葉を装飾、奥歯にものがはさまったような しっかり言葉を切り離し、手短かに話せ
顎	面足之命	ガクガク 言葉が多すぎる（しゃべり）
首前面	大戸辺之命	現実 親・恩人・目上の人を見下げている（社会も）
後面		大切にすべきところを大切にしていない 神の世界・見えない世界・心・精神など
右側		本人の家庭・身内（内側）
左側		本人の会社・社会での問題（外側）
のど	雲読之命	雲読之命の理 わが身可愛い人の言うこと飲み込まんからや
気管支	惶根之命	喘息 まんべんなく風をふかさんからや、公平そうな顔をして心の中に入り込み、この人がいいあの人がいい、この考えはいいあの考えはだめ 誰もがすばらしいのだ 独立してるようで誰かに頼らなければ何もできないような人、親に頼る人 大切にすべきところのものを大切にしていないとき

部位	守護神	おさとし
手	大戸辺之命	引き出し引き伸ばしにつかう手 かいなは抱えるためにあるんやで、間違うて欲情のために使うのではない 腕は抱きかかえることやで（ハグ）
肘		人のすることはがゆうて人押しのけてはねつけて肘を張る 肘尻黒い人 人をはねのける 肘をついて話をしたり、触ったりする人 お互いに腹をたてさせようとしている 腕組み 人の話を聞かない態度
拳		必ずやるという意志で不正のものを押しつける 税関 こぶしの人を止めてチェック 手の甲をかく したことを恩にきせる、それが通らないと腹を立てる 握っている人 欲しいと思っている もみ手 出し惜しみ
手のひら		何かできたときに握りすぎ・欲になってはいかんのや
手首		親・目上に言葉ではねかえす（足首も同じ）
左手	(男性神)	母指 月読つっぱり、父支えあう
		示指 夫婦・友人、縁談・事情
		中指 目上・おじさん・親の恩人、また食物にかかるが大戸辺（エネルギーのこと）
		薬指 兄弟・他人、物事の理立ち間違いがわからない 惶根
		小指 子の無い人・親にかかる・召使・従業員・子に当る人
右手	(女性神)	母指 母 日様
		示指 夫婦・友人
		中指 目上・おばさん・親の恩人
		薬指 姉妹・他人
		小指 子に当る人
爪		仕事注意、指先をもんで痛さを確かめる（口先・筆先）
心臓	面足之命	思足の理 恩人、親、血を押し出す・無償で 出し惜しみ・欲の心を痛めて慈悲の心足りない 気が小さい・先案じ・いつも落ち着かぬドキドキ 恩人の恩 恩を返したらつなぐ・親を正すのも子の仕事 恩返しはそれに従うことなく倒す超えること

部位	守護神	おさとし
肺	惶根之命	内心真実ない薄情、人恨み喜ばず真の心なし、共に喜ぶと肺は治る 欲深く堪能の心なし、ほしいと欲は違う、性欲・食物もっともっと 知足 家にあるもので欲しいと言うのはおかしい 広く大きな心をもって人を許し、誠の心をもって人を喜ばすという心をもたないと感知はしない
脇腹	雲読之命	ものごと包んでいるから言わんと気すまん、身勝手・理屈ゆうたらあかん 男は左、女は右が痛む
肋骨		恨みごと、大恩ある人を忘れ不足を言う 表の肋は言うか言うまいか思案
脇		恩ある人に十分していないと痛む・異情 表の脇 自分の懺悔を言うかどうか迷う 脇の穴 物事を心に隠す,そういう人やで わが身に何もかも抱え込んでいる、表に見えない仕事やけど欲が出てる、欲を持たずに日の寄進
肝臓	大食天之命	切ることが下手、物事くよくよ、欲深く欲の欲ばかり、もっとあればいいなあ、気が短い、堪忍の心がない
胆のう		堪能不足、ありがたいと思わない恩人の恩 国常立の求める清めとは正しい水を飲む
腎臓	月読之命	理を立てず人（恩人）も立てず、神さんをただで使う人 助けてもらってそのまま
	国狭土之命	色情にて人に不足を思った人、迷惑かけたことわり
脾臓	大食天之命	出す理、思いっきりが悪い
乳	惶根之命	乳は父やでチチやチチ、夫・自分の父親、夫婦の問題・不足 因縁の取り違い 乳がん 旦那が先生みたいな人やったらなあはだめ、父に金出させた
胸	〃	なんでも反対、恨み言葉胸痛める、じっと耐えよう
みぞおち		物事に心配しすぎて考えすぎ、思案が落ちつかんことがある 小骨出てくるムカムカ、親・恩人への不足
胃	雲読之命	胃がん 片意地でわが身かわいい、物事を受け入れるうけない
十二指腸		身勝手な人 （例）朝寝しながら人を使うときは早く起こして使いまくってる

部位	守護神	おさとし
小腸	雲読之命	口先では誠らしいことゆうてるけど出すことはないわなあ
大腸・直腸		取り込んで出さんからや、そのくせ分別ばかりする、持つてるもんをさあ人のために使いさあ出し
へそ		生みの親養いの親もとの理 今あなたがいるのは誰のおかげ、母に対する思い
盲腸		先の見えん欲の理 欲の心捨てる（先がゆきどまっているから盲腸）盲腸発生の増加率、がん発生と同じ
膀胱炎		表面よそおうて包み隠し、短気・気まま・勝手
背中	月読之命	お役・はたらきの理、人間とは正しきか否か
	大戸辺之命	あなたがはたはたを楽にしていない時、仕事の不満・つつぱり・ひきのぼし
腰	月読之命	立てることを知らん心（どんなことでも相手の気持ち） 放蕩する者（現代病） 重いのは前世の縁談で軽きは今生の色情、己の縁のあるもの 男 脳溢血 女 痴呆（魂はつらいつらいの連続） 心定め
肛門	雲読之命	口の裏門、与えることを惜しむ 出す理 口から入ってけつから出ることや 痔・便秘 節約のように見えてケチ、己かわいい
尻	八柱の神の集合体	いやいやながらやっていること、人を尻にひく（自分がうごかにゃならんところに人を使う
会陰	国狭土之命	ここが痛むと金なくなる、人・物のつながり間違った切り方
子宮	〃	月様の宿るところ 子宮ガン（国常立） 生理痛 血の道・つなぎ
尾てい骨	〃	つなぐべき関係つながず
足	月読之命	ささえる理
足の付け根		親の問題 右 実母 左 実父
太もも		夫婦の理
膝の上 膝の下		親・目上 頑固で受け入れない 妻・目下 お皿グラグラ、心が定まらん理
足首		親にあたること多く、腹にもって 立ち止まること 反省 ねんざ

部位	守護神	おさとし
すね		はこぶことについて、不足がある
こぶら		表面はこんで、心はこばず ものすごくしびれきれる 心そこにあらず
足の甲		はこぶこと恩にきせる
くるぶし		口だけ、言葉で人を惑わす。 踏みつける
かかと		やったらあかんことやった。方向変えや 行ってはならんところに行った
足の裏		万事人を踏みつける
つちふまず		踏んじゃならんところを踏んだ人、 踏み台にした 口先で人を押さえた人